

STEM ワーキンググループの任務

1. 世界的な流れ

“追いつき追い越せ（スプートニク・ショック）から持続可能な世界のための科学技術へ”

(1) アメリカの事情

- ①STEM の（高度な）素養を持つ労働力の不足
- ②STEM 能力の人種格差（移民の能力が不十分）
- ③STEM 能力の性差間格差（女性の活躍機会が不十分）
- ④STEM 能力の自国生・留学生間格差（留学生の能力の方が高い）
- ⑤STEM アセスメントの国際比較における低順位（改善しつつある）
- ⑥STEM 教育にかかわる教育システムの弱さ（教員数や環境の不足、教員職能）

改善のための財政支援：国内全体でおおよそ 30 億ドル、その半分は高等教育へ、また財源の 3 分の 1 は国立科学財団（NSF）の配分

(2) 日本の事情

アメリカと①、③、および⑥は共通。固有の問題も

- ① 成人の STEM レベル（主として科学技術の中身に対する関心）が非常に低い
文系人間と理系人間の乖離 — 高等教育の問題か？
- ② 専門の壁が高い。研究では融合しても教育では融合しない → 理科離れの原因の 1 つ
- ③ 基礎的教育（とくに文系分野の数学など）において標準化が遅れている
- ④ STEM の不人気による地盤低下
 - 理工系の定員割れ、科学技術・工業分野における不祥事の続発
 - 産業の空洞化

2. 大学教育学会としてできることの例（通常の学会活動に加えて）

- (1) 理系の各分野を横断した研究（自然科学・工学・農学・医系分野）
- (2) 文理を横断した研究（融合カリキュラム、リベラルデュケーションとしての科学・工学など）
- (3) 国際的な組織（AAC&U など）と連携した活動
- (4) モデルコースの開発（インテグレート科学、リベラルアーツ的工学・農学・医学）
- (5) ティップスの開発
- (6) 研修機会の提供

3. ワーキンググループ名簿

川添 允（阪府大）	濱名 篤（関西国際大）
○齋藤 準（帯畜大）	羽田 貴史（東北大）
鈴木 久男（北大）	◎細川 敏之（北大）
高橋 哲也（阪府大）	森 利枝（大学改革支援・学位授与機構）
塚原 修一（関西国際大）	山田 礼子（同志社大）
西村 秀雄（金沢工大）	山本 一雄（神奈川工大）
林 哲介（京都三大学教養）	吉永 契一郎（金沢大）

◎印は座長；○印は庶務担当

（文責：会長）